

教皇庁生命アカデミー
グローバル・パンデミックと普遍的同胞愛
— Covid-19 緊急事態に関する覚え書き —

Pontifical Academy for Life
Global Pandemic and Universal Brotherhood
— Note on the Covid-19 emergency —

全人類は試練に直面している。Covid-19 のパンデミックによって、我々は空前の、劇的な、グローバルな難しい状況に置かれている：我々の生の計画を不安定にするその威力は、日ごとに増している。その脅威の浸透は、我々が当たり前にしてきた我々の生き方の様相に疑いを差し挟む。我々は想像もしなかったパラドックスを苦しみながら生きている：疾病から生き残るために、我々はお互いから孤立しなければならない。しかしもし我々が、相互に孤立して生きることをこそ学ぶべきだとしたら、我々はじきに悟るだろう。我々の生にとって、他者との生がいかに不可欠であるかを。

まさに科学技術と管理支配の陶酔のただ中で、我々はこの接触感染（contagion）の拡散に対して自分たちが社会的、技術的な準備がない状態にあることを発見した：それを認め、その衝撃を受け入れることは、我々にとって困難だった。そして今、我々は、その拡散を抑えるために突進している。しかし、我々が、この現象が引き起こしている存在の不安定さを考えるとき、この現象を前にした我々の身体的、文化的、政治的傷つきやすさ（vulnerability）の認識に関して、これと類似した準備のなさ — 何らの抵抗も、とは言えないまでも — を、我々を見る。この不安定化は、科学や治療装置のテクノロジーの射程を超える。科学者や技術者にこの状況の責任を負わせることは、不公平（unfair） — そして誤り — であろう。同時に、人間性（humanism）の意味と諸々の価値についてのより責任ある熟考によってもたらされるより以上の深みとインプットが、薬剤とワクチンの研究と同じ緊急性を持つことも、確実に真である。それだけではない。この深遠とこの責任を悟ることは、我々の共有された人間性のゆえに、結束と合一、同盟と同胞愛の文脈を創造する。それは、科学と政治への男女の貢献を抑制するどころか、大いに彼らを支援し、彼らの役割を再確認する。彼らの献身 — それに対して、すでに当然の、そして心からの感謝が全員から寄せられている — は、強められ、賞讃されて、確実にこの時を切り抜けるだろう。

この文脈において、その制度上の指令により、可能な最善の人間性の探究において科学と倫理学の同盟を促進し支援する教皇庁生命アカデミーは、自身の省察をもって貢献したい。その意図は、この状況のある要素を、社会的関係と人格に対するケアを育まなければならない、新たにされた精神の内部に配置することである。今日、人間のコミュニティの同胞愛が挑戦を受けている例外的な状況は、最終的に、この人間性の精神が規則正しいテンポで制度的文化に影響を与えるための機会に変換されなければならない：個々の人々

の間で、そして人々の調和的な結合において。

傷つきやすさと限界における連帯

第一に、パンデミックは我々の人間の状態をラディカルに特徴づける不安定さ〔心もとなさ、拠り所のなさ、根拠の不確かなあてにならない状態〕(precariousness)を際立たせる。世界のいくつかの地域では、個人とコミュニティの存在状態の不安定さは、日常的な経験である。一たとえそれが利用可能だとしても、全員がケアにアクセスすることを許さない、あるいは、たとえ世界中では不足していないとしても、十分な量の食料にアクセスすることを許さない貧困によって。世界の他の地域では、不安定さのエリアの数は、科学技術の進歩によって次第に減少している。一我々は傷つきやすい〔弱い〕者ではない(invulnerable)、あるいは、我々はすべてのことについて技術的解決を見出しうる、と考えることによって、錯覚に陥る程度にまで。しかし私たちがなす多くの努力も、実験室やヘルスケア設備の未発達能力を次々に呑み込んできた経済的、科学技術的な最先進社会においてさえ、進行中のパンデミックをコントロールすることはできない。我々の科学技術能力についての楽観的な予測は、おそらく、我々はこのマグニキュードのグローバル・エピソード〔世界的流行病〕の拡散を防ぐことができるだろうと、我々が想像することを許してきた。一他方で、それとはますますかけ離れた仮説を生み出しつつ。我々は、事実とはそうではないことを認識しなければならない。そして今日、我々は、我々の進歩が生み出す保護とケアの桁はずれの資源と共に、我々のシステムの弱さを示す、そして我々がそれについて十分用心してこなかった副作用もある、と考えることを勇気づけられてさえいる。

いずれにせよ、我々が、我々自身の運命の主人でないことは、痛ましくも明らかである。そして、科学も同じように、その限界を我々に示している。我々はすでにこれを知った：科学の諸々の結論は、つねに部分的である。一便宜上、あるいは実質的理由によって、現実のある側面に焦点を合わせ、他を除外するがゆえに、あるいは、いずれにせよ一時的なものであり、また改訂を必要とする科学的理論の性質のゆえに。しかし、我々が Covid-19 ウィルスへの対応で経験してきた不確実性(uncertainty)において、我々は、新たな明瞭さをもって、方法論と有効性の確認(validation)に関して固有の要求を有する科学的知識の一部を成す漸進性と複雑さに気づいた。我々の理解の不安定さと限界もまた、グローバルで現実的で共有されたものとして出現する；ある文明国や統一組織に、自らを他よりもよい支配者〔君主〕であると考えてることを許し、都合のよいときに自らを孤立させようことを許す現実的な論拠はない。今、我々は、我々の相互連関性(interconnectedness)に「触れる」ために十分接近している。実際、我々は、我々のツールの有効性による以上に、我々の傷つきやすさの露見によって、より相互連関している。接触感染(contagion)は、一つの国から他の国に極めて急速に拡散する；一人の人間に起こることが、みんなにとって決定的なことになる。この状況は、我々が知ってはいたが適切に内面化〔主観化〕できなかったことを、より直接的に明白にする：すなわち、好むと好まざるとにかかわらず、我

々の行動の帰結は我々自身の上に降りかかるばかりでなく、つねに他者にふりかかる。社会的帰結をもたらさない個人の行為はない。これは、各個人に、そして各コミュニティ、社会、住民センターに当てはまる。表面上は、自分自身にだけ作用するように見える無謀な、あるいは愚かなふるまいは、おそらくその行為者自身には影響を及ぼすことなく、接触感染のリスクにさらされる全員に対する脅威になる。このようにして、我々は、いかにみんなの安全が他のみんなにかかっているかを学習する。

エピデミックの突発は、確かに人類の歴史における定数〔不変なもの〕である。しかし我々は、現行の脅威の特徴 ―すなわち、それは、その浸透を、我々の現在の生活の仕方にとってもよく順応させ、防御手段を巧みに出し抜くことできる― を隠すことはできない。我々の発展モデルは、効率的かつ広範囲にわたる輸送機関やデリバリー・ネットワークによって、これまで侵されていない森林エリア ―人間の免疫システムが知らない微小生物〔もしかしたら Covid-19 に対抗しうるかもしれないような〕が発見される― を開発する。我々は、我々の発展モデルの諸々の効果を知る必要がある。我々は、おそらく、今我々を攻撃しているものに対する解決を発見するだろう。我々はそれをしなければならぬ。が、この種の脅威〔コロナ・ウィルス〕は、長期間、組織系統〔全身性〕の潜在 (systemic potential) を蓄積しているという事実を自覚しつつ。

第二に、救済と健康を同一視する社会モデルのイデオロギッシュな強調を避けて、我々が持つ最良の科学的組織的資源をもって問題に取り組むことが、よりよいだろう。科学技術にとっての敗北を考えるよりも ―それは、その進歩のゆえに、確かにつねに我々をエキサイトさせずにはおかないが― 同義に、それは、我々をその限界によって謙遜に生きることをさせるに違いない。疾病と死は、我々にとって最も大切な、最も深い愛情に対する深い痛手であるが、しかしそれは我々に、その正しさの放棄やそのきずなの断絶を強いることはできない。我々が、その愛情ときずなが自らの内に内包されている愛を遂げることができない無能を受け入れなければならないときさえも、そうではない。たとえ我々の生がつねに死を免れないとしても、我々は、愛の神秘 ―そこに生命が存する― はそうではないという希望を持つ。

事実上の相互連関から選択された連帯へ

我々は、我々が遭遇しているこの恐ろしい緊急事態の間ほど、どの生命も共通に生命であることを実感しつつ、我々の生の基盤にある相互依存状態に気づくよう求められたことはなかった。我々はともに生命を創り、生命は「他者」から来る。人間の生命を、ただ生物学的事実として考えることを拒否するコミュニティの資源は貴重な必需品であり、そこには、責任をもって応じる、ケアに必要な他のすべての活動が随行する。おそらく、我々は、軽率にも、その価値がこのような時にこそ重要性を発揮する、この歴史的遺産を荒廃させてきた。そして感情的つながりとコミュニティ精神がひどく疲弊するときに、共有し貢献することのできる関係的素養を、深刻に過小評価してきた ―まさに生物学的生命

を守るための我々のニーズによって。

二つのかなり粗暴な考え方 — にもかかわらず、それらは明らかにありふれたものになり、我々が自由と権利について語る際の参照点になった — が、今日の議論に持ち出される傾向がある。第一の考え方は、「私の自由は、他者の自由が始まる場所で終わる」。この定式は、つねに危険なまでに曖昧であるが、経験の現実的理解にはふさわしくない。この定式が、事実上、強い立場にある者によって肯定されるのは偶然ではない：我々の自由は、好むと好まざるとにかかわらず、つねに絡み合い重なり合っている。むしろ我々は、共同して働く我々の自由 (our collaborative freedom) を、共同善 (common good) のために差し出すことを学ばなければならない。エピデミックが養いうる傾向 — 他者を我々から遠ざけるべき「感染の」脅威、すなわち、そこから我々自身を保護する敵と見る傾向 — を克服するために。

それゆえ、我々は、新たなそして深い情動をもって、我々は相互に委ねられていることを事実として受け入れるよう求められている。今日ほど、ケアする関係が、人間の共存のための根本的なパラダイムとして示されたことはなかった。事実上の依存から、選択された連帯への変化は、自動的な変換ではない。しかしすでに我々は、責任ある行動と同胞愛的ふるまいへと移行する、種々のサインを目にしている。我々はこれを、特別な明瞭さをもって、ときどき自分自身の生命の危険さえ冒して病者の苦痛を緩和するために寛大に全エネルギーを捧げるヘルスケア・スタッフのコミットメントに見る。彼らの専門職業意識 (professionalism) は、契約上の義務の範囲のはるか上に及び、かくしてその仕事がりわけ、単に「契約」や「商取引」ではない、意義と価値の表現のエリアであることを証明する。しかし同じことは、そのスキルを他者への奉仕のために用いる研究者や科学者にも当てはまる。力と情報を共有するコミットメントは、医薬の安全性と有効性を確立する実験プロトコルについて、研究センター・ネットワーク間で迅速な協力を確立することを可能にした。

同様に、我々は、毎日ポジティブに勇敢に同胞愛を保護し、養うことを選択する他のすべての女性と男性を忘れてはならない。それは、家庭の母親と父親、高齢者と若者である；それは、客観的に難しい状況においてさえ、誠実に良心的に彼らの仕事を続ける人たちである；それは、奉仕することを止めない何千人ものボランティアである；それは、Covid-19 で亡くなった多くの聖職者たちの話によって明らかにされているとおり、彼らの生命を犠牲にしてさえ、彼らのケアに委ねられた人たちに奉仕を続ける宗教コミュニティのリーダーたちである。

政治的に、現在の状況は、広い視野をとるよう、我々を駆り立てる。国際関係において (そして EU のメンバー国間関係において)、「国家利益」の点から解答を得ようとするのは近視眼的で、錯覚を生じさせるロジックである。不可避の政治的、商業的、観念論的、および関連する抵抗に確固として対応する、効果的な協力と、効果的な調整なしに、ウィルスは止まらない。もちろん、これらは非常に深刻で骨の折れる決断である：我々は、

オープンなビジョンと、つねに個別的な人口集団の直接的な望みを満足させるわけではない選択を必要とする。しかし、著しくグローバルな現行の原動力を想定すれば、我々の応答が効果的であるためには、自己の境界内で生じることに限定されてはならない。

科学、医学、政治：社会的つながりが試されている

政治的決定は、確実に科学的データを考慮に入れなければならないだろうが、そのファクターだけに限定されることはできない。人間の現象を、経験科学のカテゴリーのみに基づいて解釈することを許すことは、技術的レベルのみに基づいて解答を生むことを意味する。それは、バイオ・ポリティクスが我々に教えてきた危険な道に従って、生物学的プロセスを政治的選択の決定子とみなすロジックに終わる。単一の技術的・科学的仕方ですれらを理解することは、文化間の違いを尊重するものでもない：健康、疾患、死、そしてヘルスケア・システムに帰せられる様々な内包は、豊かさをもたらさう。

我々はそうではなく、科学 (science) と人文学 (humanism) の同盟を必要とする。それは統合され、分離されない。一あるいは相互に対立しない。Covid-19 のような緊急事態は、まず何よりも連帯の抗体 (antibodies) をもって克服される。封じ込めの技術的および臨床的手段は、広範かつ深遠な共同善の探究に統合されなければならない。共同善は、特権を持つ人々への利益を指示する傾向と、市民権、収入、利害、あるいは年齢による傷つきやすい人々の軽視に抵抗しなければならない。

同様に、このことは、臨床実務により密接に関わる「ケア・ポリシー」に従ってなされるすべての選択に適用される。多くの国が遭遇している緊急の状況は、同時に全員に使用できない限られた資源の rationing [分配、配給、消費制限] に関して、医師たちにドラマティックで苦痛に満ちた決定を強制することへと導きうる。そのようなケースにおいては、生物学的レベルで、分配を避けるために可能なすべてを行った後、決定は、つねに平等で価格をつけることのできない各人の生命の価値と尊厳における相違に基づくことはできないことを、つねに心に抱くべきである。決定は、そうではなくて、患者のニーズに基づく、可能な最良の仕方での処置 (treatments) の使用に関わる。すなわち、彼または彼女の予後に基づいた、疾患の重さ、ケアの必要、そして治療がもたらさう臨床上の利益の評価。年齢は、選択を決定する唯一の自動的な基準ではありえない。そのようにすることは、高齢者や非常に弱い人に対する差別的態度へと導きうる。いずれにせよ、可能な限り、同意の上の、そしてしっかりした論拠に基づく基準を定式化する必要がある。一災害医療が我々に教えてきたように、緊急事態における恣意または即興を避けるために。もちろん、それは繰り返しに耐える：分配 (rationing) は最後のオプションである。可能な範囲での同等の処置の探索、資源の共有、および患者の移送は、正義の枠内で、慎重に考察されなければならない代替案である。反対の条件下では、創造性も特定のニーズに対して解決をもたらしてきた。一たとえば、多数の患者に対する同じ人工呼吸器の使用のような。いずれにせよ、我々は、決して病者を見捨ててはならない。たとえ、もはや利用しうる処

置がないときにも：緩和ケア、苦痛のマネジメント、および人格的同伴は、決して省略されてはならない。

公衆保健に関しても、我々が今経験していることは、我々に真摯な検討を迫る。一たとえそれが将来、混乱のない時代においてのみ実行されうるものであるとしても。問われているのは、予防的アプローチと治療的アプローチとの間の、個人的次元と集団的次元との間の、バランスである（健康と個人の権利、および公衆保健の間の密接な相互関係を想定するのなら）。これらは、医学がそれ自体のために設定しうる、より深い関心に基づく問いである。それは、全体にわたって社会生活における健康の役割を、教育や環境のような、そのあらゆる次元で考察する。

グローバルなエピソードのリスクは、責任のロジックでは、保健システムのグローバルな調整を要求する。〔リスクに対応しうる保健システムの〕保有レベルは、診断の速さ、対応と均衡のとれた封じ込め措置、適切な構造（structure）、記録保持システム、および情報とデータを共有する能力に関して、その最も弱いリンクによって決定されることを自覚している必要がある。緊急事態を包括的に扱い、決定を下し、そしてコミュニケーションを調和よく編成する（orchestrate）ことのできる権威者たちは、不正確なデータと断片的なレポートによって、突発するコミュニケーションの嵐（“infodemia”）を避けるための参照点としても信頼されうる。

弱者を保護する義務：試される福音の信仰

このシナリオにおいては、高齢者や特別なニーズを持つ人々など、最も脆弱な人々に特別な注意が払われるべきである。他のすべての条件が等しければ、エピソードの致死率は、罹患した国の状況、および各国内部の状況に応じて、多様である。それは、利用可能な資源、保健システムの質と組織、人口集団〔住民〕の生活の状態、〔今生じている〕現象の性質を知り、理解し、情報を解釈することができるか、に関わる。すでに日常生活において、人々がシンプルな基本的保健支援を保障されていない場所では、より多くの人が死亡するだろう。

この最後の考察もまた、多くの弱者が直面しているより以上の窮地において、この歴史的時局における神の行為を我々がどのように語るかについて、大いに注意を払うよう我々を促す。我々は、人類が今経験している苦しみを、神性に対する「大逆罪」と神の企てた「聖なる報復」の対称軸でとらえる粗雑なスキーム〔図式〕に従って解釈することはできない。最も弱い者が苦しむであろう、かかるシナリオにおいては、まさにその者を神が最もケアし、神が彼と一致するという単純な事実が、その可能性の機先を制する（マタイによる福音書 25:40-45）。聖書とイエスが果たした約束の成就に耳を傾けるなら、生命の側にあること ―神がそれを我々に命じる― は、「他者」のための人間性（humanity）に満ちた諸々の挙動を通して、現実のものになることが示される。その挙動は、我々が見

ているように、このところ欠けることがない。

気遣いのどの形態も、善行のどの表現も、復活したイエスの勝利である。これを立証することは、キリスト教徒の責任である。いつも、そしてみんなのために、この重大事に、たとえば我々は、難民や移民のような非常に弱い人々を襲う他の災難、あるいは闘争、戦争、飢餓に苦しめられ続けている人々を忘れることはできない。

とりなしの祈り

福音の接近 (evangelical closeness) が、身体の限界または敵対する抵抗に遭遇するとき、とりなし〔仲裁〕(intercessory) —十字架に見出される— が、たとえ人々が神の祝福に応じるようには思われないうときでさえ、その止めることのできない決定的な力を保持する (出エジプト記 32:9-13)。信者からのとりなしの嘆願は、我々が悲劇的な死の神秘、我々の今日のあらゆるストーリーの一部である怖れを甘受することができる場所である。キリストの十字架によって、人間存在 (human existence) を、偉大な通過と考えることが可能になる：我々の存在の外皮は、蝶の解放を待つさなぎのようなものである。全被造物は、聖パウロの言葉では、「産みの苦しみ」を生きている。

我々は、この光において、祈りの意義を理解しなければならない。イエスが彼らを同じように我々との連帯に引き入れたように、みんなのための、そして苦しんでいる人全員のためのとりなしとして。また、父〔神〕への信頼の表現として苦しみを生きる仕方をイエスから習う契機として。我々が同じように人を信じることを可能にする源泉は、この神との対話である。ここから、我々は、我々の世界において、どのようにより人間的に共存しうるかについて、現実が我々に理解させることに従って、我々のすべての責任を果たし、我々の心を自由に〔神へと〕転換させる内的な強さを得る。我々は、イタリアで最も病に冒された都市の一つ、ベルガモの司教フランチェスコ・ベスキの言葉を想起する：「我々の祈りは呪文ではない。神への信仰は、我々の問題を魔法で解決しない。かえってみんなに、各人に、様々な仕方で生きるよう求められる義務を果たす内的強さを与える。この悪をせき止め勝利することを求められている者には、特別な仕方」。

この信仰の告白 (profession) を共有しない者も、この普遍的同胞愛の証拠から、人間性になかった状態の最善の部分を目指する手がかりを引き出すことができる。厳密な共同善としての生命への愛のゆえに、人間が愛とともに労苦する陣営を放棄しない人間性は、全員の感謝と神の敬意を得る。

(2020. 3. 30)

* [] 内は訳者による。

邦訳は主に英語版から行ったが、部分的にイタリア語版を用いた。

(Japanese translation by Etsuko Akiba)